

五輪マラソン

アスファルトより最大4度高い

路面温度の上昇を抑える効果があるとして、東京五輪の猛暑対策に国や都が導入を進めている「遮熱性舗装」が、人が立つ高さでは逆にアスファルト舗装より気温や紫外線が高くなるという研究結果がまとまった。

30日学会で発表東農大・榎村教授研究チーム

榎村修生東京農業大教授(運動生理学・環境生理学)の研究チームが30日の日本スポーツ健康科学学会で発表する。榎村教授は「遮熱性舗装は熱中症のリスクを高める」としている。

「熱中症リスク高める」

遮熱性舗装

猛暑対策 逆効果

問題は強い日射

16年8月31日、東京・青山通りの実験コースを試走した瀬古利彦さんが「明らかに涼しい」と大鼓判を押し、導入が決まった遮熱性舗装が、猛暑対策としては逆効果になるという研究がまとまった。

榎村教授らは五輪開催期間(7月24日～8月9日)に重なる今年7月26日、路面、50センチ、150センチ、200センチの高さで気温・紫外線強度などを計測した。路面温度はアスファルトより約10度低かったが、高さ50センチ、150センチ、200センチではいずれも



アスファルトより遮熱性舗装の方が高かった。7月26日は暑さ指数28～31度だった。暑さ指数31度以上と条件が厳しかった8月8日の計測では、遮熱性舗装はアスファルトより最大で4度高かった。「日射が強くなればなるほど遮熱性舗装の方が高くなります(榎村教授)。



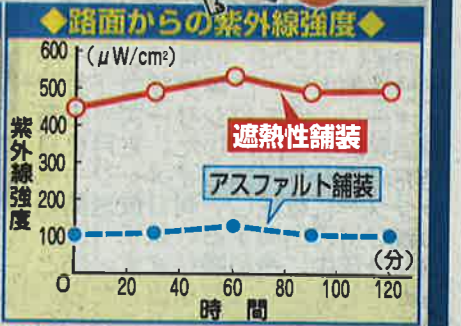
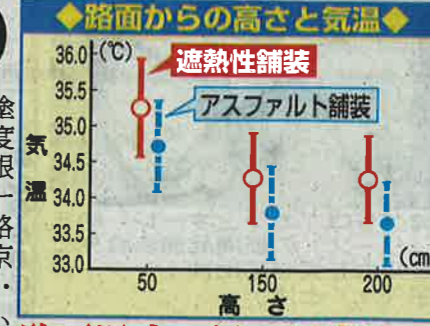
16年8月 「アスリート・観客にやさしい道の検討会現地試走会」 暑さを和らげるための特殊な舗装が施された道路を試走する車いす陸上の国内トップアスリートである花岡伸和氏(手前)と元マラソンランナーの瀬古利彦氏(手前から3人目) (共同)

暑さ指数高いときほど逆効果になるのかを計測しないこと

国交省悪条件下での計測 今のところ考えていない

ひとつの研究成果

国土交通省と東京都の担当者らは今年20日、榎村教授を訪ねた。「ひとつの研究結果だと思



路面温度は低いが高さ50、150、200センチはいずれも高い



「五輪期間中は暑さ指数が30度を超えます。平均値ではなく、暑さ指数が高いときはどうなるのかを計測しないといけない」と指摘する。

榎村教授らの計測では、高さ50センチが最もアスファルトとの差が大きかった。「小さな子ども、ベビーカーに乗った赤ちゃん、車いすの人が特に影響を受ける」という結果は出ていません。

「おろかがいし、データを見せていただきます(国交省道路局・武藤隆道環境専門官)」。武藤氏は「ひとつの研究結果だと思

今日(令和元年)8月27日 火曜日